

考古学特殊研究 国分寺瓦の研究（12） 奈良時代における伊勢・伊賀・志摩の官営瓦工房

（梶原 2006「古代伊勢における官営瓦工房」『名古屋大学文学部研究論集』155

梶原 2006「古代伊賀・志摩における官営瓦工房」『三重大史学』6）

はじめに

先回までの例（西海道・吉備地域・東海地域）より：

国分寺造営においては、国司の主導により、在地の生産組織（もしくは、地方財政の範疇内での各国間の援助関係を含む）を活用する形で、国分寺瓦屋が成立。

国司が造営に関与した官衙系施設は、国分寺だけではない。

→国府・駅家・その他諸施設

その中で、おなじく国司が造営を管轄する施設ながらも、**国府と国分寺で瓦の様相が異なる例**が散見する（肥前・備前など）。

本講義では、国府と国分寺の瓦を比較検討することで、地方造瓦組織の成立期の様相をあきらかにしていきたい。

題材として、国府と国分寺、国分尼寺の瓦当文様がそれぞれ異なる、伊勢を扱う。
また、併せて隣国である伊賀・志摩もとりあげる。

第1節 伊勢

伊勢国分寺の瓦

尼寺含め、軒丸瓦 19 型式、軒平瓦 13 型式に分類。

重圏文・重廓文軒瓦なども少量存在するものの、主体となるのは、

- ・外区珠文帯をもつ単弁八弁蓮華文軒丸瓦
- ・独特の中心飾りをもち、唐草が上下に枝状に展開する均整唐草文軒平瓦

出土地点や文様変遷の状況から、創建瓦として、

軒丸瓦Ⅱ A03 型式と軒平瓦Ⅱ B01 型式（金堂）

軒丸瓦Ⅱ A02 型式と軒平瓦Ⅱ B02 型式（講堂）

があげられ、そこからやや降る瓦として、

軒丸瓦Ⅱ A04 型式→軒丸瓦Ⅱ A05・軒平瓦Ⅱ B07 型式→

→軒丸瓦Ⅱ A06・軒平瓦Ⅱ B04 型式という年代観

製作技法的特徴：軒丸瓦の多くが積み上げ技法の横置型一本作りであるが、
最後出の軒丸瓦ⅡGO1 型式のみ、折り曲げ技法。

→平城京での変化と一致（神護景雲元（767）年以降）

伊勢国分尼寺の瓦

- ・外区珠文帯をもち彫りの浅い、単弁十二弁を中心とした軒丸瓦
- ・中心飾りの中央にV字状の意匠を配した均整唐草文軒平瓦が主体。

軒丸瓦ⅡCO2・O4 型式（創建期）→ⅡCO3・ⅡDO1 型式→ⅡBO1 型式

軒平瓦ⅡBO5・O6・O9・10・11（創建期）→ⅡBO8 型式

製作技法的特徴：僧寺同様、積み上げ技法横置型一本作り。ただし胎土や細部調整
などは異なっており、工房は違っていたことが指摘【村居 2008】。

後出のⅡDO1 型式の瓦は、折り曲げ技法

→国分寺との技法的情報の共有。

国分寺系瓦と国分尼寺系瓦の国内波及：3系統の波及経路・分布域

- ・河曲郡：大鹿廃寺・一尼寺系軒丸瓦ⅡCO1 型式と、僧寺系軒丸瓦ⅡBO3 型式
一志郡の上野廃寺・小野瓦窯でも同様のセット（折り曲げ技法？）
- ・飯野郡：ヒタキ廃寺・伊勢寺廃寺・野中垣内廃寺 安濃郡：浄土寺南遺跡
おもに補修瓦として、国分寺系の軒瓦がみられる。
- ・多気郡：逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺
創建瓦として、国分尼寺系の軒丸瓦が使用されている。

伊勢国府の瓦

年代：均整唐草文軒平瓦ⅡAO1 型式と同範である平城京 6719A 型式の瓦の年代が、
「恭仁宮遷都以前の天平年間（729～740）」【山崎 1994】とされるなどから、
おおむね8世紀中頃の年代があたえられている。

軒丸瓦 11 型式、軒平瓦 7 型式が確認。

軒丸瓦はすべて重圈文。軒平瓦はⅡAO1 を除いてすべて二重廓文。

軒丸瓦は、二重圈文ⅠAO1～O9 型式、二重圈文中心に珠点をもつⅠBO1 型式、
三重圈文ⅠCO1 型式。

瓦当径が小さめのⅠAO1 型式およびⅠAO2 型式が多数を占める。

ⅠAO1・ⅠAO2→ⅠAO3（ここまで政庁地区中心）

→ⅠAO4～O9・ⅠBO1（矢下地区中心）→ⅠCO1 の順に変遷

製作技法はほとんどが、積み上げ技法の横置型一本作り。

ⅠCO1 のみが、折り曲げ技法 → 国分二寺との技法変化の共通性

また、小型と大型２種類の瓦規格が存在

→難波宮軒廊出土の 6012・6572D・F（小型瓦）と関連。国分寺にも。

伊勢国府系瓦の国内波及：天花寺廃寺・中谷遺跡・大角遺跡・切山瓦窯・鈴鹿関

天花寺廃寺を除き、関や駅家、頓宮など公的色彩の強い施設が多い【竹内 1993】

伊勢における造瓦体制の復原

- ① 国府・国分寺・国分尼寺のすべてにおいて、横置型一本作りという中央系の技法。
成形台の形状や、軒丸瓦の大小作り分け、積み上げ技法から折り曲げ技法への変化
など技法的な共通性も高く、工人集団間の密接な情報交換の結果と考えられる。
- ② にもかかわらず、３者は文様的にはまったく異なっている。
- ③ ３系統の瓦は、生産地自体も異なる：川原井瓦窯（尼寺）・八野瓦窯（国府・尼寺）
また、国内にそれぞれ異質な分布をもつ。

- ① より、各造瓦組織の管掌者は同一（国司）であることが知れる。
- ② より、重圏文・重廓文という中央系の文様が、国分二寺であえて避けられている。
→中央との文様の遠近を超え、寺院の文様として蓮華文・唐草文が好適という意識。
- ③ より：
 - ・国分寺と尼寺の瓦が、それぞれ異なる郡に波及
（文様波及の意味：工人の里帰り説・造営協力への報償説など）
→国分二寺造営において、郡ごとに造営の担当が割り振られた可能性。
→さらに言うなら、国分二寺の造瓦はおもに各郡によって賄われており、
郡単位の造瓦管理が復原（武蔵など東国の文字瓦でも同様な様相）
 - ・国府系瓦については、官系施設を中心に、限定的な分布。
また国府からは、多種にわたる刻印瓦が出土→生産管理のための工人名
（恭仁宮・多賀城などと同様）
→国府の造瓦工人が、国衙などによって直接管理されていたことを表す？

第２節 伊賀

伊賀国分寺の瓦

- ・軒丸瓦：複弁四弁蓮華文。軟質の瓦。周辺諸寺には類例がない。
- ・軒平瓦：ⅠA 型式：平城京 6689 型式に酷似する均整唐草文。硬質の焼成。
同范瓦が毛原廃寺・夏見廃寺・三田廃寺・鳳凰寺廃寺など、
伊賀国内のほとんどの寺院に広域に分布。
ⅡA 型式：中心飾りが特徴的な均整唐草文軒平瓦。軟質の瓦。
複弁四弁軒丸瓦とセットになると考えられる。

軒平瓦ⅠA型式について

国府系瓦の一類型と位置付け、国分寺造営を契機に作られ、各寺に展開した。

↑

- ・出土量の問題（国分寺でわずか2点のみ。対応軒丸は国分寺のみ出土しない）
- ・生産地の問題（岩屋瓦窯という、他寺（大和毛原廃寺）所用瓦窯で生産）
- ・分布の問題（伊賀国内にとどまらず、伊勢地域にも波及）

⇒国分寺の主要瓦は、複弁四弁蓮華文軒丸瓦と、均整唐草文軒平瓦ⅡA型式。

均整唐草文ⅠA型式は、周辺他寺からもちこまれた「在地系瓦」

（「毛原廃寺造営に深く関与していた岩屋瓦窯が、廃絶する前に国分寺造営が開始され、一部の瓦が流用されたものであろうか」（森川桜男・山田猛氏））

- ・主要瓦の年代（国分寺の創建年代）

- ・平城京の軒平瓦6763型式が、中心飾りの形状などやや類似。

この瓦は平城京第Ⅳ期後半（神護景雲元（767）年～宝亀元（770）年）

- ・伊勢の御麻生園廃寺や広明町瓦窯、天花寺廃寺で同文瓦が出土。

御麻生園廃寺では東大寺式の軒丸瓦と共伴すると考えられ、

またこの東大寺式軒丸瓦は、西隆寺（神護景雲年間創建）の系譜をひく。

→伊賀国分寺の本格的な造営は、8世紀第3四半期の後ろのほう？

第3節 志摩

志摩国分寺の瓦

- ・軒丸瓦3型式、軒平瓦3型式と、比較的多種が知られている。

軒丸瓦は、外区に複線鋸歯文を施した単複弁四弁蓮華文軒丸瓦が2種および、

外区に重圏文を巡らせる複弁六弁または七弁蓮華文軒丸瓦。

最多型式は、伊勢西方廃寺・野中垣内廃寺と同範の複線鋸歯文縁複弁蓮華文。

伊勢におけるこの種の瓦では、文様のにもっとも後出。

軒平瓦は、偏行唐草文軒平瓦が2種と、三重弧文軒平瓦がみられた。

- ・胎土、焼成が2種にわかれる：多くの黒色砂礫を含むものと、そうでないもの。

伊勢系の瓦の多くも前者であり、それは伊勢においてはみられない特徴。

→志摩国内に範をもちこんで生産

→いわゆる「在地系瓦」ではなく、志摩国分寺瓦屋で生産された瓦

- ・国分寺造営において、隣国私寺から範を持ち込み瓦生産：稀有な例。肥前・壱岐

おわりに